

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：13601
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520346
 研究課題名(和文)メドヴェージェフの「巡回劇団ノート」研究 バフチン 友人名義の著作 への一視角

 研究課題名(英文)P.N.Medvedev's editorial work in "Zapiski peredvizhnogo teatra"(1922-1924)

 研究代表者
 佐々木 寛(SASAKI, Hiroshi)

 信州大学・学術研究院総合人間科学系・教授

 研究者番号：70153997
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：平成24年度にサンクトペテルブルグの公共図書館でP.N.メドヴェージェフが編集した雑誌『巡回劇団ノート』計30号分のうち20号分のコピーを入手した。子息のJu.P.メドヴェージェフが執筆したP.N.メドヴェージェフの伝記(ロシア語組版校正原稿計53頁)を、上記資料と照らし合わせつつ訳出。平成26年度末に、うち半分を冊子印刷して、日本ロシア文学会の会員を中心に100部配布。まだ知られてない部分の多いバフチン・サークルの活動の全容を知るための基礎的資料を提供することができた。(残りの半分も近々に冊子刊行して配布の予定である。)

研究成果の概要(英文)：In 2012 in the Public Library of Sankt-Peterburg I copied 20 numbers of the periodical "Zapiski peredvizhnogo teatra", edited by P.N.Medvedev.
 I translated the biography of P.N.Medvedev, written by his son Ju.P.Medvedev (Russian proofreading printings, 53 pp.), to Japanese, referring to above-mentioned material. A half of this translation was printed into brochures and on 31 march, 2015 I distributed them to 100 members of the Russian Literary Study Society of Japan.

研究分野：ロシア文学、文学理論

キーワード：P・N・メドヴェージェフ ユーリー・メドヴェージェフ 『巡回劇団ノート』 バフチン・サークルの著作

1. 研究開始当初の背景

ロシアの哲学者・文芸学者ミハイル・バフチン(1895 - 1975)とそのサークルのメンバーのヴァレンティン・ヴォロシノフ、パーヴェル・メドヴェージェフの著作については、1991年にソ連邦が崩壊するまで、ヴォロシノフ、メドヴェージェフの名前で出ているものはすべて、バフチンが友人の名前で出したものという見方が支配的であった。ソ連邦崩壊のあと、バフチン・サークルの個々のメンバーの伝記的事実が次々に明らかになって、1980年代まで支配的であった上記のような見方は成り立たなくなった。

1995年にロシアの出版社がヴォロシノフとメドヴェージェフの著作集を企画し、ヴォロシノフの伝記については、刊行された彼の巻の解説で、それまで不明だった点が明らかになった。メドヴェージェフの巻は刊行されずに終わったため、彼の生涯についてはほとんど知られぬままになっていた。

2. 研究の目的

メドヴェージェフの主著『文芸学の形式的方法』(1928)は、1992年に公刊された1961年1月10日付のバフチンの書簡によって、この著作がメドヴェージェフとバフチンの緊密なコンタクトのもとにつくられたものであることが明らかになった。メドヴェージェフのこの著作におけるイニシアティブがどの程度のものであったのかを探るために、メドヴェージェフが1922年から1924年にかけて編集にあたった雑誌『巡回劇団ノート』を調査して、そこに載っている彼の論説や書評文がどのように1928年の主著に取り込まれているかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

サンクトペテルブルグの公共図書館所蔵の雑誌『巡回劇団ノート』の、メドヴェージェフが編集を担当した30号分のコピーを調査資料として入手すべく、研究初年度に上記図書館を訪れて、30号分のうち20号分をコピーで入手できた。しかし残りの10号分については、資料の劣化が進んでいたためにコピーを取る許可が下りなかった。

研究目的を達成するために必要な資料を十分に準備することができなかったため、方法を一部変更して、佐々木が1995年にヴィテプスクのバフチン学会で子息のユーリー・メドヴェージェフから受け取った、メドヴェージェフの巻の解説原稿を訳出することにした。訳出に当たっては、コピーで入手した『巡回劇団ノート』を随時参照して、引用箇所等の訳出が正確なものになるようにした。

さらに、桑野隆著『バフチン』(平凡社新書、2011年)の書評論文を公表するにあたって、2012年のサンクトペテルブルグ、モスクワ出張の際に意見交換することのできた

ロシアのバフチン研究者の所見を、論文中に反映させることができた。

4. 研究成果

(1)書評論文：佐々木 寛「桑野隆『バフチン』(平凡社新書、2011年)を批判的に読む」バフチン受容の死点克服のために、信州大学人文科学論集2号(通巻49号)2015、pp.273-286において、桑野隆の著書『バフチン』(平凡社、2011年)を、以下の3点について批判し、わが国におけるバフチン受容の問題点を指摘した。

1910年代後半から20年代半ばまでの、哲学者バフチンの思想形成の過程がほとんど論じられておらず、初期バフチンの著作についての説明が貧弱であること。そのために、1920年代後半から30年代にかけてのバフチンの言語哲学、小説言語論への転換がどのようにしてなされたのか、その道筋がよく判らないこと。

バフチン・サークルのヴォロシノフ、メドヴェージェフの著作を問題にする場合に当然言及しておかなければならない二つの事柄(1992年に公刊された1961年1月10日付のバフチンのV・コージノフ宛手紙、および1920年代後半におけるレニングラード大学の東西文学・言語比較史研究所とヴォロシノフ、メドヴェージェフの関係。いずれも1991年のソビエト連邦崩壊後に明らかになった)に、一言も触れていないこと。

著者が「第三章 ポリフォニーと対話原理」でドストエフスキー論初版第2部第1章から引いている「言葉の分類図式」の箇所、訳のあて方。バフチンの小説言語論の肝心かなめの問題が理解できていないこと。

の批判を行なうために、初期バフチンの2つの論考「行為の哲学によせて」「美的活動における作者と主人公」から1929年の著書『ドストエフスキーの創作の諸問題』を経て1930年代の小説言語論へと到るまでの、バフチンの哲学的人間学から言語哲学への転換の道筋を跡づけた。この作業は、バフチンを研究する上での最も困難な問題の一つであったので、今回の作業で得られた成果は大きい。

の批判を行なうために、バフチンが1961年1月10日付の手紙で、ヴォロシノフとメドヴェージェフの著作のうち、自分がかかれとの緊密な共同作業の下につくったのは1928年の『文芸学の形式的方法』と29年の『マルクス主義と言語哲学』の2冊だけであり、かれらの他の著作は自分とは関係ない、と述べている点を指摘して、1970~80年代に出来上がったバフチン神話(バフチンがヴォロシノフ、メドヴェージェフの名前を借りて、マルクス主義のスタイルで一連の著作を公にしたとする)はもはや通用しないことを指摘し、ソビエト連邦崩壊後のバフチン

研究に根本的な仕切り直しを迫ることになった重要な資料に一言も触れようとしない著者の姿勢を批判した。

また 1920 年代後半にヴォロシノフとメドヴェージェフが研究員として所属していたレニングラード大学の東西文学・言語比較史研究所は、バフチンのマルクス主義への関わり方を考えるうえで重要な意味をもつはずなのに、著者がこの問題について全く触れていないことを批判した。マルクス主義のイデオロギー学構築をめざすこの研究所で、文芸批評家 V・A・デスニツキーの指導の下に、ヴォロシノフとメドヴェージェフはマルクス主義のスタイルで書かれた一連の著作を発表した。メドヴェージェフの『文芸学の形式的方法』、ヴォロシノフの『マルクス主義と言語哲学』、そしてバフチンの『ドストエフスキーの創作の諸問題』はいずれも、この研究所の叢書として刊行されたものであった。

では、バフチンのドストエフスキー論初版(1929年の『ドストエフスキーの創作の諸問題』)と第2版(1963年の『ドストエフスキーの詩学の諸問題』)のいずれにも見られる言葉の分類図式について著者が説明する際に、Odnopravlennoe dvugolosoe slovo に「一方向の二声の言葉」という訳をあて、Raznopravlennoe dvugolosoe slovo に「多方向的な二声の言葉」という訳をあてている点を批判した。

バフチンは 1959~61 年の草稿「テキストの問題」で、小説言語を分析する際に「作中人物のことはが属する意味の平面」と「作者のことはが属する意味の平面」を区別して、作者のことはが作中人物のことはを描くのであり、したがって、作中人物のことはの声に作者による評価の声がかぶさることになると指摘している。ロシア語接頭辞の odno- には、「一つの」のほかに「同じ」という意味があり、razno- には、「多くの」のほかに「別々の」という意味がある。したがって、Odnopravlennoe dvugolosoe slovo には、「二つの声と同じ方向の言葉」という訳をあてるべきであることを、そして Raznopravlennoe dvugolosoe slovo には、「二つの声が別々な方向の言葉」という訳をあてるべきであることを指摘した。(二つの声と同じ方向である場合には、作中人物の声だけがあるように読者には感じられ、二つの声が別々な方向である場合には、作中人物の声が揶揄的に提示されているように感じられる。)

バフチンのドストエフスキー論の邦訳(新谷敬三郎訳『ドストエフスキー論 創作方法の諸問題』、冬樹社、1968年。1974年改版、望月・鈴木訳『ドストエフスキーの詩学』、ちくま学芸文庫、1995年、そして桑野隆訳『ドストエフスキーの創作の問題』、平凡社ライブラリー、2013年)はいずれも、訳者がバフ

チンの小説言語論の肝心かなめの問題を理解していないために、この箇所適切な訳がなされていないことを指摘した。

(2) 翻訳: 佐々木寛訳、信州大学全学教育機構ロシア語研究室刊、ユーリー・メドヴェージェフ著「パーヴェル・ニコラエヴィチ・メドヴェージェフ(社会学的詩学の起源)」(2の1)、2015、pp.1-28の冊子100部を、日本ロシア文学会の主立った会員に配布して、これまであまり知られていなかったバフチン・サークルのパーヴェル・メドヴェージェフの生涯と仕事の全体を知るための資料を提供した。

元のテキストは、1995年7月にヴィテプスク市で行なわれたバフチン学会に佐々木が参加した際に、同じく報告者として来ていたユーリー・パーヴロヴィチ・メドヴェージェフ(1937-2013)から手渡された組版段階の校正原稿《Pavel Nikolaevich Medvezhev (U istokov sotsiologicheskoi poetiki)》で、サンクトペテルブルグの書肆アスタ・プレス社[Asta-press Ltd]が、バフチン・サークルのヴォロシノフとメドヴェージェフの著作を集成すべく全3巻で企画した《バフチン・サークル》シリーズの第3巻、メドヴェージェフの巻のために、子息のユーリー・メドヴェージェフが準備した50頁を超える大部の解説原稿である。アスタ・プレス社は1巻目のヴォロシノフの巻(1995年)を出して倒産、2巻目と3巻目は日の目を見ずに終わった。ユーリー・メドヴェージェフはのちに、この解説原稿の記述と部分的に重なる内容の文章を何度か公にしているけれども、キシニョーフのギムナジウム時代に始まって1938年の逮捕銃殺にいたるまでのパーヴェル・メドヴェージェフの生涯全体が見渡せるこの解説原稿の価値は、執筆からすでに20年を経た今日なお、失われていない。

この原稿は英訳が予定されていたが、訳者の逝去により実現を見なかった。

佐々木訳の後半部分も、追って冊子で配布する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

佐々木 寛、桑野隆『バフチン』(平凡社新書、2011年)を批判的に読む バフチン受容の死点克服のために、信州大学人文科学論集、査読有、2号(通巻49号)、2015、pp.273-286、<http://hdl.handle.net/10091/18261>

〔図書〕(計 1 件)

佐々木 寛訳、信州大学全学教育機構ロシア語研究室、ユーリー・メドヴェージェフ著

「パーヴェル・ニコラーエヴィチ・メドヴェー
ージェフ（社会学的詩学の起源）」2の1、
2015、28

6．研究組織

(1)研究代表者

佐々木 寛 (SASAKI, Hiroshi)
信州大学・学術研究院総合人間科学系・教
授
研究者番号：70153997

(2)研究分担者

なし

研究者番号：

(3)連携研究者

なし

研究者番号：